

# 「書道の芸術性と実用性」初探

— 「墨書四面木簡」の制作から —

北山聡佳

(奈良教育大学美術教育講座)

橋本昭典

(奈良教育大学国語教育講座)

A Preliminary Study of “The Artistry and Practicality in Calligraphy” :  
Through writing characters in black ink on the four sides of square wooden bars

Satoka KITAYAMA

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

Akinori HASHIMOTO

(Department of Japanese Language Education, Nara University of Education)

**要旨：**書における芸術性とは何かは、書道が本来的にもつ実用性と絡みあう難問である。「書道の芸術性と実用性」の授業は、実践と理論の両面からこの問題を考える趣旨をもつ。その一つの試みとして、「四面木簡」という特殊な素材に、『千字文』を楷書で、「いろは歌」と「あめつちの詞」を仮名、漢字仮名交じりの書で書き、それを展示するという実践をおこなった。墨書木簡の変遷から、記録や習書のための実用物だった木簡に、やがて仮名で歌が書かれるその過程に芸術性の萌芽が窺えたが、特殊素材に文字を書く際の意識がそれに大きく影響することが本実践によって裏づけられた。

**キーワード：**仮名書道 "Kana"-style calligraphy / calligraphy of "Kana" characters

作品展示の意義 significance of exhibiting works

墨書木簡の多様性 wooden objects "Mokkan" of various size and shape with notes written in India

## 1. はじめに

漢字によって記されることばは、原始より何らかの情報を伝えるものであった。それを書記する者は事実を正確に他者へ伝えるという意識をもっていた。それがいつからか芸術とされる書が生まれることとなった。その時期や区別については、さまざまな見解がある<sup>1</sup>。しかしながら、今日においてなお、書道芸術とよばれるものは、実用から完全に遊離して純粋に芸術であるのだろうか。そもそも書道における芸術性と実用性とは截然と区別できるものであるのだろうか。

本年度、奈良教育大学に新しく設置された大学院修士課程伝統文化教育・国際理解教育専攻の実践コア科目(選択必修科目)として位置づく「書道の芸術性と実用性」は、まさにこの問題を受講生とともに考えていく趣旨をもつ。初年度である2022年度においては、「墨書四面木簡」の制作という実践からこの問題を考えることとした。

## 2. 新しい修士課程科目「書道の芸術性と実用性」

### 2.1. 授業概要

2022年度受講者は14名であった。修士課程全体に開かれた科目であるため、書道を専攻する者だけでなく、書道の初学者も数名含まれていた。また、3名の外国人留学生を含む。担当者は、仮名書道を専門とする北山と、中国古典、日本漢文学を専門とする橋本の両名である。北山が、漢字から、万葉仮名や平仮名、片仮名を含めた仮名文字へとつづく文字の歴史に触れる講義を含め、実技を中心とした指導をおこなった。仮名が隆盛を極めた平安時代の古筆臨書を通して、作品として成立するための各要素(筆画、連綿、墨量の変化など)の分析を踏まえ、それぞれが文字を用いて自己表現ができることを目指した。橋本が随時、木簡、なかでも「墨書四面木簡」の意義についての講義をおこなった。本稿で扱う実践である「四面木簡」への墨書は、授業終盤の2時限を当てた。最終的に、完成した15本の木簡を、仮名書道作品の成果とあわせて展示した。

### 2.2. 韓国出土「墨書四面『論語』木簡」の復元

木簡はふつう薄い木の板の片面か両面に墨書する。「四

面木簡」とは、四角柱に整形した木の4面を使って文字を書いたものである。これは、現在のところ、韓国と日本にのみ出土例がある。韓国では『論語』が、日本では『論語』と『千字文』が見つかっている。

北山と橋本は、本授業に先だって、2022年3月に、クラウドファンディング事業「奈良教育大学学生による

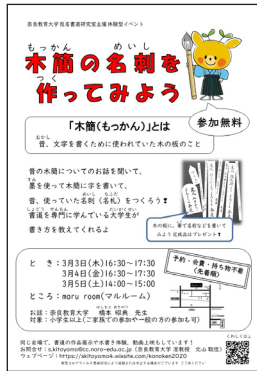


図1 木簡ワークショップの案内

仮名書道・文字文化の魅力発信プロジェクト」(2021年11月30日クラウドファンディング成立)の成果として、奈良の町屋を会場としたイベントを開催した。そのなかでワークショップをおこなうために(図1)、事前研修として、韓国から出土した「墨書四面『論語』木簡」の復元をおこなっている。

「墨書四面『論語』木簡」は、韓国金海市鳳凰洞地区から2001年に出土している。7世紀初め、新羅時代のものであるとされる。上下が欠損しているが、四面に記されているのは、『論語』公治長篇の連続した文であることから、その原型を推定することができる。最新の研究によると、それは、長さ：約1254～1463mm；幅：15～19mm、である<sup>2</sup>。

この「四面墨書木簡」の用途は、諸説あるものの、教科書であったと考えることができる。木簡の多くが、文字を書いては削り取り、再利用しながら使い捨てられる薄い木材を使った書写記録用であったのとは異なり、4面をもつ木簡は、保存され、参照されるものであったと言える。

そこで、この文字文化の魅力発信プロジェクトにおいては、教科書木簡づくりとして、韓国で発見された「墨書四面『論語』木簡」の1本を復元することを試みた。木簡制作整形の専門家に依頼して、トドマツ(榎松)を資材とする、20mm×20mm×1300mmの大きさをもつ墨書可能な木簡を入手した。

「四面木簡」への『論語』公治長篇本文の墨書は、北山が指導する仮名書道研究室所属学生10名が分担しておこなった。4面で合計327字を書く木簡を2本制作するため、学生を2グループに分け、1人あたり約60字を書き継ぐ形とした。この長さ書き継いでいくことについて、学生たちは案を出しあい、練習用紙に字の大きさや筆遣いを何度も練習しながら試行錯誤を重ねた。「とにかく失敗しないように」とたがいに励ましあう姿が見られた。完成した「墨書四面木簡」は町屋展示会場の入り口付近に立てかけて展示し、ワークショップではそれをを用いて解説をおこなったのであるが、特筆すべきは、そのなかで学生たちが、ワークショップ参加者に、

木簡に書くときの「書き直しができない」という緊張感を語る場面が多くあった点である。この「緊張感」は芸術と実用相互の関係性を考える本授業実践において示唆に富むものであった。

### 2.3. 授業における「墨書四面木簡」制作の位置づけ

前年度におこなった、韓国出土「墨書四面『論語』木簡」復元指導の経験を踏まえ、本授業においては、書道における芸術性と実用性を考えるという観点から、4面のうち、2面に『千字文』を、残り2面に「いろは歌」と「あめつちの詞」を書くこととした。

日本からも、韓国と類似の『論語』が墨書された「四面墨書木簡」が2点出土している。

観音寺遺跡(徳島市)で発見された「四面木簡」(29mm×19mm×653mm)(図2)は、欠損があり、4面に連続する文章が書かれていたと断定するのが難しい状況にある。削ったあと、別の文書が書かれた形跡のある面が認められるため、習書木簡ではないかとされる。一方で、削られる前には、韓国出土「墨書四面『論語』木簡」と同様、『論語』が連続して書かれたものだったのではないかとの推定も可能だとされる<sup>3</sup>。



図2 観音寺遺跡出土「墨書四面『論語』木簡」  
資料は、徳島県立埋蔵文化財総合センター提供

飛鳥池工房遺跡からも「四面墨書『論語』木簡」が出土している。これは3面に文字が記され、『論語』以外の面は、「観世音経巻」の文字、内容判読の難しいメモのような文となっており、習書木簡と見なされるものである。

同じ飛鳥池工房遺跡からは、「四面墨書『千字文』木簡」が出土している。出土したのは、約156mm×約10mm×24mmの断片であるが、4面に連続して『千字文』の本文が記された形跡が窺えることから、欠落部分の推定が可能となる。そこからは、この「四面木簡」の長さとして600～900mmを想定することができる。

さらには、1面に6句(24文字)が書かれ、1本には24句(96文字)、その四角柱木簡が10本(960文字)と、残り1本に10句(40文字)が書かれた、合計11本の「四面墨書木簡」で構成された『千字文』が存在した可能性もある、との指摘もある<sup>4</sup>。

このような壮観を呈する四角柱の木簡がもし存在したとするなら、それは、韓国出土のものと同様、手習いの模範となるような教科書的な性質をもったものと見なすに十分といえよう。

以上から、本授業では、日本においても、『論語』と『千字文』を四角柱の4面に墨書した木簡教科書が存在したと考えた。長さは、日本の『論語』『千字文』の出土例からは最大900mmとなるが、行政文書が記された木簡については、日本においても1190mmのものが存在している(平城京出土「告知木簡」)。よって、韓国と同様の形態の「墨書四面木簡」が存在したと考え、1300mmの四角柱木簡を使って、そこに墨書することとした。

なお、京田遺跡(鹿児島県霧島市)からも「墨書四面木簡」が見つかっている。これは、木簡を土に立てて、四方から4面の文字が見えるようにした「告知木簡」とされる。このような「告知木簡」もまた、教科書的な性質をもった木簡と同様、見られることを前提として文字が書かれたものだといえる。文字を書き、それを削っては別の文字を書いて再利用し、使い捨てられていった多くの板状の木簡とは、この点で大きな違いがある。四角柱に整形され、4面に墨書された大型の木簡からは、見られることを意識して書かれたという共通の性質を見てとれる。本授業において「墨書四面木簡」制作をおこなった目的はここにある。

このような教科書的な文の書かれた木簡を、受講者全員の墨書で制作し、それを展示する。多数の人に見られることを前提として、実用的な教科書を作る。ここに、書道における芸術性と実用性という難問に対し、少しでも解明へと向かう手がかりがあるのではないかと考えたのである。

#### 2.4. 「物」に書きつけられる仮名文字

受講者には1人1本の木簡を与えた。先述の通り、4面のうち2面に『千字文』を、残り2面に「いろは歌」と「あめつちの詞」を書かせた。『千字文』は文字通り、1000字の長い韻文であるため、これを受講生14名と北山とで分担し、合計15本の木簡で全体が完成するようにした。

「いろは歌」と「あめつちの詞」については、仮名の書と、漢字仮名交じりの書で、同一文を全員が書くこととした。これは、それらの難易度を考慮してのことである。

日本語の発音のすべてを重複することなく仮名で綴った手習い歌である「いろは歌」については、斎宮跡(三重県多気郡)など数カ所から、平安時代後期以降の土器に墨書されたものが見つかっている。これらはいずれも、割れた土器や棄てられた土器を利用して、仮名を練習したものとされる。つまり、鑑賞されることを意識して書いたものではない。一方で、8世紀後半から9世紀のもの

とされる、三十一文字の仮名文字がへら書きされた刻書土器(山梨県甲州市ケカチ遺跡出土刻書土器)が存在している。祭祀や献上を想定しうるその用途や、文字の特定、筆跡の巧拙についてはいまだ定説をみないが、あらかじめへら書きして完成された土器であり、その仮名文字は他者の眼を意識したものであると考えてよいであろう。

「いろは歌」の木簡は、12世紀後半の平泉から出たものをはじめ、17世紀後半とされる平安京跡のものなど数例がある。紙の時代になってなお制作される墨書「いろは歌」木簡の用途は未詳であるが、中世の歌物語に登場する、歌を仮名文字で、木に書きつけたり、障子や襖に書きつけたりといった書写行為には公開性が期待されていたとすることと関連があるように思われる<sup>5</sup>。

「あめつちの詞」の出土例はないが、「あめつち」が『千字文』の冒頭句である「天地玄黄」を連想させることから、その関連性が指摘されるように、その成立や背景については諸説あるものの、仮名文字を覚えるための手習い歌であったことに疑いはない。そこで、習書の教科書とすべく『千字文』とともに、この2つの手習い歌を仮名の書と、漢字仮名交じりの書で書くことにしたのである。

### 3. 形態からみる墨書木簡の用途

#### 3.1. 万葉仮名で記された和歌木簡

出土する墨書木簡は7世紀前半頃とされるものが最も古く、これらはほぼ王宮のあった飛鳥、難波地域に限られる。最古級の墨書木簡の用途は主に次の4種である。

- ・出来事や行政実務の事実関係を記録した文書木簡
- ・伝票や帳簿などの記録木簡
- ・納入物品の記載、また、整理のための荷札・付札木簡
- ・同じ字を繰り返し書くなどした習書木簡

これらはいずれも実用に資する書写記録といえる。

7世紀も半ばになると、完全には実用といえない木簡が現れる。前期難波宮遺跡から発見された、万葉仮名で「皮留久佐乃皮斯米之刀斯(はるくさのはじめのとし)」と、歌が記された木簡である(3.3.図4参照)。

7世紀後半のものとしては、石神遺跡(明日香村)、藤原京(橿原市)出土の「難波津の歌」木簡がある。『古今和歌集』仮名序に「手習い歌」として登場する「なにはづにさくやこのはなふゆごもりいまははるべとさくやこのはな」を記した木簡は20例近く見つかっている。8世紀中頃とされる紫香楽宮・宮町遺跡(滋賀県甲賀市)からは、表面に「なにはづ」が記され、裏面に「なにはづ」と「歌の父母」として対をなす、「あさかやま」の歌(安積山の歌、『万葉集』3807)が書かれたものも出土している。これは削り屑の両面に書かれていたものであった。

「難波津の歌」木簡は、宮都だけではなく、観音寺遺跡(徳島市)、辻井遺跡(姫路市)といった地方にも存在する。また、土器(平城京、長尾岡京など)や瓦(桜井市山田寺跡、斑鳩町中宮寺跡)に書かれたもの、さら



には、法隆寺五重塔天井の組み木、醍醐寺五重塔天井板に書かれたものもある。

「安積山の歌」の他に、『万葉集』収録の歌としては、2例ある。「あきはぎ」木簡（秋萩の下葉の歌、『万葉集』2205）は、馬場南遺跡（京都府木津川市）にて発見された。裏面には、「馬」の字が字体を変えて複数書かれており、これは字の練習跡と考えられる。

石神遺跡（明日香村）から出土した「あさなぎ」木簡（朝風に来寄る白波の歌、『万葉集』1391）は、くぎのようなものを用いて字が刻まれた刻書木簡である。羽子板状に整形された木に、歌の前半の14文字が2行にわたり、バランスよく収まるように刻まれている。ただし、その2行は左から右へと書かれてあり、また、連続する同一2字のうち1字を脱して、踊り字「々」で補うなどしていることから、歌の意味がわからないままに仮名文字として書き写したのではないかとされる<sup>6</sup>。



図3 「多奈久毛利」墨書木簡

最新の出土例として、2021年に平城京跡で発見された和歌木簡がある。これには「多奈久毛利（たなくもり）」（『万葉集』3310）と読める上部に、「倭歌壹首」と記されており、「倭歌」（和歌）ということばの最古の用例ではないかと注目されている。裏面には、意味未詳の万葉仮名が記されている（図3）。

万葉仮名で和歌を記した木簡の出土例は以上のようなものがあるが、これらは習書かそのレベルにあるものとの評価が主流であった。

### 3.2. 墨書和歌木簡の用途

和歌が万葉仮名で墨書された木簡は、木簡の削り屑に書かれていたり、削られた跡があったり、裏面に仮名文字練習の落書きがあったりと、和歌を書き終わったあとに、削るか、追記するか、裏書きするかなどして再利用されたものであった。裏面書きがなくとも、同じ木簡に漢文の行政文書があわせて記されていたり、字の配列が一定でなかったり、左から書かれていたりしていることから、これらの木簡の墨書は、仮名文字を覚えるため、あるいは歌を書く作法を学ぶための習書だと見なされてきた。中国の木簡が墓所に副葬品として埋葬された状態で出土するのとは異なり、日本では遺跡において、これらの木簡が、削られたり折られたりして、廃棄された状態で見つかることが、いっそうそのことを裏づけるともいわれる。

墨書された木簡の形態も、削り屑はいうまでもないが、形ある板状の木簡であっても、観音寺遺跡「難波津の歌」木簡のように、両端が不揃いで、字を書く表面にも凹凸があるようなものであった。「あさなぎ」木簡は羽子板状に整形されてはいたものの、刻まれた字は能書とはいいたいものであった。

それでは、木簡とは使い捨てを前提として使用する、メモやノートのようなものでしかなかったのでしょうか。

### 3.3. 「はるくさ」木簡の可能性

2006年に、前期難波宮遺跡から発見された「はるくさ」木簡（図4）は、墨書木簡研究の画期となっている。



図4 「皮留久佐乃…」墨書木簡  
（左から、木簡画像・赤外線画像・実測図）  
資料は、大阪市文化財協会提供

7世紀半ばに書かれたとされるこの木簡は、他の木簡に比べて、その形態が整ったものである。木簡の下部は欠落しているものの、上端と左右両端はまっすぐに整形されていることから、下部も同様であったと考えられる。表面は丁寧に削られているという。しかも、裏面は未整形で、表面とは異なり目が粗いままである。裏面に字の練習跡などの落書きもない。

以上のことに注目し、考察を進めた栄原永遠男はあらかじめ歌を書くために専用制作された「歌木簡」という木簡が存在したとの説を提唱し、学会に波紋を呼び起こした。

発見されたのは長さ185mm、幅265mm、厚さ約6mmという木簡に、「皮留久佐乃皮斯米之刀斯」の11文字が記されていた。幅265mmの中央に文字列が配されていることから、当初より片面にのみ一行で歌を書く予定だったと考えられる、と栄原は指摘する。そしてこの「はるくさ」木簡に対し、これまでの習書説を覆して、清書説を打ち出したのであった。また、字の配列から、下部の欠落部分を復元すると、この木簡は約2尺（600mm）程度の長さになるとする。そして、この大型

木簡は、公式度の高い儀式・歌宴の場に持参し、立てかけるか、壁に掲げるかして参列者に示し、あるいは、手に持って掲げるなど一定所作のもとで、詠みあげられたとする考えを示した<sup>7</sup>。

犬飼隆はこの説を敷衍して、器楽の伴奏や舞とともに歌を唱和する場があり、その際に、会場に「歌木簡」を飾って歌詞を示したのであろうとする<sup>8</sup>。

以上のような栄原・犬飼説には、疑問や反論が出ている。その中心は、「はるくさ」木簡は一例のみであり、「歌木簡」の多くは「難波津の歌」であることから、これらの木簡は手習い歌として習書したものであるとする説である。現在のところ諸説の妥当性をはかる決定的な証拠はない。書道の芸術性と実用性を考える本授業においては、その妥当性には踏みこまず、次の点だけを押さえておくのでよいと考えた。すなわち、犬飼隆が、「はるくさ」木簡についていうことばである。

入念に整えられた長い材に、丁寧な字で、片面一行に書かれていたとすると、人に見られることを意識して書いたのであろう。<sup>9</sup>

この指摘は非常に重要である。たとえ手習い歌の習書であったとしても、2尺から2尺半という大型の形状にしっかりと整えられた木簡に文字を書く際には、人に見られる字を書くという意識がはたらいたことであろう。「墨書四面木簡」でなくとも、このような機能をもった板状の木簡が7世紀に存在したと見なせるのである。

#### 4. 整形された素材に書くときにはたらく意識

##### 4.1. 書道芸術を支える美的意識

富谷至は書芸術の要件として次の2点を挙げる。

- i 文字を美しく書こうという意識
- ii 他人の書を美しいと見て、それを模倣せんとする意識

そのうえで、中国は後漢の時期にこれを満たすことになったとする。要因として、前漢期の木簡にも、「懸針」など書記の視覚的効果を狙ったものがあるが、それはあくまで公文書に権威を付与するための技術であるのに対し、後漢に入ると、石碑を建立することにおいて美しく見せようとする意識が生まれたとする。それはまた、公文書に書かれた文字が伝える内容が命令であったのに対し、石碑に書かれた文字が伝える内容は、読み手に賛同・同調を求めるものであったことにもよるのだという<sup>10</sup>。

人の目を引きつけるために工夫がされるようになっていく。長い期間にわたって見られることを前提としている石碑は、特別な形態をもった素材に文字を刻すものであり、長く見られることを前提としている。その刻させる原稿となる文字を書く者の意識はどうであっただろうか。それは、2尺から2尺半という通常の3倍ほどもある木簡に、立てかけること、掲げること、つまり人に見られることを前提として書くときの意識もこれと同じ

であったといえるのではないだろうか。

##### 4.2. 墨書木簡のもつ多様な役割

四角柱の「四面木簡」は、2尺半の板状の木簡よりも、さらに特別であったに違いない。すでに指摘のあるように、木材資源が乏しいため、4面に仕上げて書く面を増やした、と考えることもできなくはないが、発見数の少なさと、そこに書かれたのが『論語』『千字文』であるという点から、「四面木簡」の用途は、やはり習書ではない、と考えるべきであろう。

ちなみに、『古事記』によれば、『論語』『千字文』は、和仁が百濟よりもたらしたとされるものである。そして、2～2尺半の木簡に多く書かれた「難波津の歌」もまた和仁の作とする伝説があった。やはりそこには特別な意識があったと見るべきであろう。

「墨書四面木簡」は、その特別な形態から、発見当初から呪的要素をもつことが指摘され、呪符であるとか、護符であるとかいった指摘も見られた<sup>11</sup>。また、「四面木簡」が、たとえ習書であったとしても、『論語』と『千字文』の習書には、単に字を覚えるための練習ではなく、特別な意味がこめられていたとする説もある。それは、字の上達や官人としての出世を願うものであったという。

ここには、字の熟達を目指すという実利的な行為とあわせて、別の意識がはたらいているのを見てとることができる。それは、文字通りの意味として理解可能なことばを書きながら、その外にある、あるいは随伴する、なんらかの思いを、特定であれ不特定であれ、なんらかの他者に対して、伝えようとする意識とでもいえるものである。そしてそこには、それを見てもらうための工夫もまた加味されることになる。このとき、可読性をもつ実用的なことばがその実用性を保ちながら、ことばを書きつける素材や文字の装飾によって、人の眼を惹きつけるような「作品」へと変容させることが可能となるのである。

「はるくさ」木簡と同じ頃のものとして、桑津遺跡（大阪市住吉区）から、上部に7つの「日」の字がT字型（横3、縦5の7つの「日」字）に綴られた「呪符木簡」が出土している。「呪符木簡」は、記されたことばの内容を文字通りに伝えることを意図したものではない。この出土例もまた、特別な素材、形態に書かれる文字が、さらにその文字にも装飾性を加えることで、ことばの意味以上になにかを伝えるものへと変容することの傍証となるであろう。

#### 5. 授業における「木簡に書くこと」の意義と可能性

##### 5.1. 受講生による「四面木簡」への墨書

以上に述べた、『論語』『千字文』といった特別な書物、「難波津の歌」のような手習い歌を、整形された特殊な形態をもつ木簡に書くことの意義をしっかりと踏まえたうえで、本授業の受講生には、四面木簡に、『千字文』（分担）を楷書により2面に、「いろは歌」「あめつちの詞」



を残りの面に、仮名の書と、漢字仮名交じりの書の書体により書かせることにした。

先述のように、木簡はすでに専門業者によって整形されたものを入手しており、砥の粉などを塗りこまなくても滲むことが少ない材質であった（北山が事前に担当部分の見本作品を作成し、この点も確認しておいた）。しかし、水分が多いと繊維に沿って墨液が広がる可能性があるため、墨をかなり濃く磨って、ゆっくりと書くように指導した。木書用墨液などもあるが、それを使わず、木簡墨書がおこなわれていた当時と同じく、墨を磨らせて書かせた。

まず、楷書による『千字文』の2面から書かせた。どの部分を書くかを決める段階から、受講生たちは時間をかけた話しあいをおこなっていた。これは自身の得意な字面や文字の組み合わせを考慮してのことである。第1面と第2面にバランスよく配置するため、定規で長さを測り、鉛筆で目安を書く者や、練習用紙に書いたものを真横に置いて、長さを確認しながら書く者もいた。もちろん、目印をせずそのまま書き進む者もいた。楷書については、授業において特段、実技練習をおこなっていないが、筆遣いや運筆の速度のみを教え、書風は自由とした。大きな画仙紙に書くことに慣れた者であっても、ふだんとは違う集中力をもって、一画一画丁寧に書きこむ姿が見られた。一方で、第1面の左の面を第2面として書き進めなければならないところ、反対の面（第1面の右の面）に書いてしまう者が数名いた。当時も習書の過程においてはそのようなことが起きていたと思われる。完成後の振り返りでは、こうした失敗をした受講生から、書字や字配りに集中しすぎたことが原因だと反省の声が聴かれた。

また、書く手の高さの位置を調整する者や、姿勢なども工夫する者が出てきて、互いにどのようにしたら墨書しやすいかを話しあう場面もあった。さらに、木簡本来の使用方法として、小刀で削って何度も書き直すことができたということを活かし、誤字をした際に、カッターでうまく削って、サンドペーパーで磨いて書き直す者もあった（図5）。



図5 カッターで削り（左）、サンドペーパーで整えている（右）様子

仮名の書および漢字仮名交じりの書による「いろは歌」と「あめつちの詞」の部分は、苦戦する者が多いことが予想された。本授業において、仮名については、臨書を中心とし、作品の創作活動は、葉書サイズ程度でしかおこなっておらず、ほぼ初めての経験となる者が複数いたためである。そこで、北山が事前に作成した墨書木簡をコピーし、それを参考に、これまで学んだ筆遣いや仮名文字の変換を自由にさせて、創作の疑似体験のような活動

とした。しかし、本授業の受講までに仮名書道に触れたことのなかった学生も、それまでの臨書の成果が垣間見える堂々とした書きぶりで、自己表現の段階へと移ろうとしている様子が見られたことは、本授業の実技の大きな成果であると考えられる。完成後に、本格的な書道の経験がなかった学生の感想には、「仮名文字を木簡に書いてみると、つながる部分（連綿）が多く、書き慣れた漢字よりもさらさらと書くことができ、しかも配置が左右に偏っても、それがおもしろく感じて、仮名書道ができるようになった気がした」とあり、自信をつけた様子がかがえた。

学生それぞれに進行状況は異なったが、授業2回のなかで書きあげることができた者が多くいた。書けなかった者も、補習を設定し、1時間程度のなかで全員が書きあげた。

はじめは木に書くことに抵抗のある者ばかりで、130cmの長さに苦心する者もいたが、書いているうちに慣れていき、だんだん集中してそれぞれのペースで書き進められる様子が見られた（図6）。まっすぐに書くことが難しいという声を多く聞いたが、1面、2面と書き進めるうちにまっすぐ書けるようになっていた。学生たちの、少し書いては全体を眺めるという行為は、実用的な教科書を作成しているという意識を越え、見られることや審美的観点から完成度を高めているといえる。すなわちここには、本実践が意図したとおり、芸術性を求める意識の萌芽を見てとれる。



図6 四面木簡墨書の様子

## 5.2. 受講生による「四面木簡」の展示

本授業の成果発表として、奈良教育大学図書館の展示スペースにおいて展示をおこなった（図7）。展示の構成を考えることも学生に任せ、木簡以外にもそれまでに

制作した仮名書道作品をあわせて展示した。

全14本の木簡を並べているうちに、「自分の字が小さい」、「〇〇さんのこの文字が好き」、「書き直したい」といった声が聞かれ、自身の一本で完結していたものを、全体のなかでの調和を考えると意識をもつに至った。「墨書四面木簡」の展示は存在感があり、『千字文』と「いろは歌」、

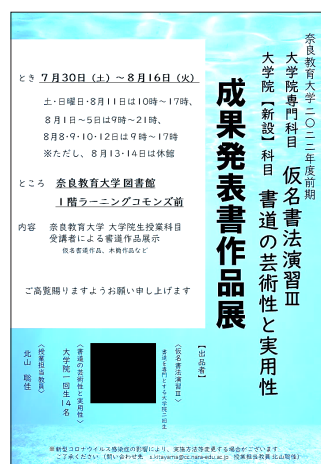


図7 展示の案内（出品者名の部分を加工）

「あめつちの詞」が見えるよう、またできるだけ全員の木簡の4面が見えるよう工夫して展示できた。結果として、「立てかける」という7世紀の「歌木簡」を彷彿とさせるものになった(図8)。また、解説と釈文を記載した紹介パネルも掲示し、北山の作品のみ、観覧者が手に取って4面を見られるように設置した。安全性も考慮し、学生による木簡は固定し、さらにバリケードも設置した。

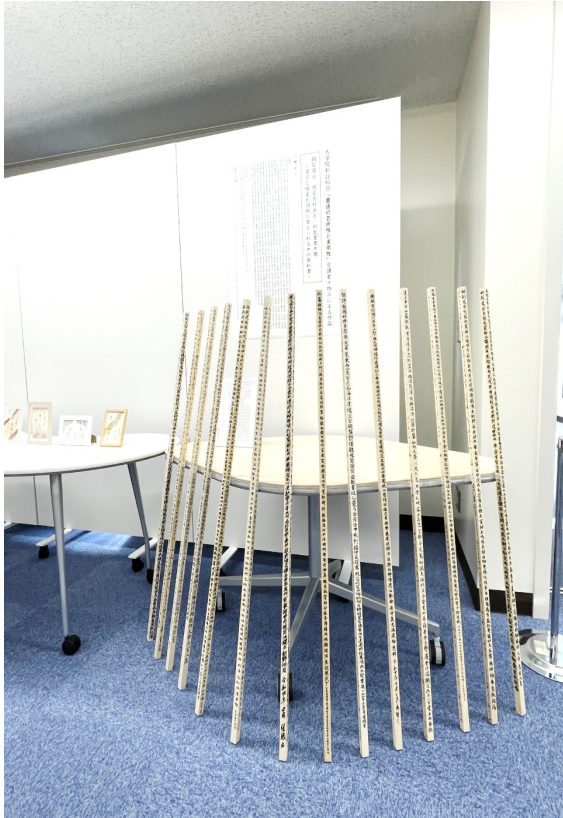


図8 「墨書四面木簡」展示の様子  
(バリケード設置前)

本展示はコロナ禍における本学の入構制限が緩和されたことで、関係者以外の見学も可能な展示となり、感想もいろいろといただくことができた。やはり木簡の展示が目を引きいたようで、珍しいという声や、どのように書いたのかという質問が寄せられた。学生たちは、すべての木簡がそろって展示されている様子を見て、達成感を得たようである。

学生たちの振り返りによると、ほぼ全員が木簡に書くことは緊張し、やり直しができないことで、丁寧に書こうと思っている。そのなかで次の感想が目立つ。「現在、出土しているさまざまな木簡は、書いた人はこんなにも見られるとは思っていなかっただろう(とくに落書きや練習の木簡について)。わたしたちの書いた文字が、もしかしたら思わぬところで見られるかもしれないと考え、もっとうまく書こうと考え、同時に見られたくないもの(書字したもの)は隠したい。」「自分のこの木簡がこのまま残れば、将来、誰かが見るかもしれない。

恥ずかしい。」以上は、書道がもつ芸術性と実用性の問題における苦悩を象徴する発言であるといえる。

### 5.3. 「木簡に書くこと」の意義とその可能性

ここで、木簡を用いた実践について述べる。「四面木簡」はもちろん、木簡を用いた実践例のまとまった報告は見られないが、そもそも「木簡を書く」という実践授業そのものに問題があると思われる。本授業の最初に、受講生に、木簡への墨書の経験の有無を尋ねたところ、3割程度が経験を有していると答えたが、その内実は、「特定の木簡の書体で紙に書いたことがある」というものであった。また、書道の展覧会場にて、ときに、「臨 木簡」や「木簡調」というキャプションを目にすることがある。その意味するところは、中国で出土した漢代の木簡に見られる隸書をベースに書かれた作品である。

しかし、墨書木簡の変遷を見ると、木簡の文字文化は中国だけのものではなく、朝鮮、日本へと伝わり、とくに日本においては、紙の時代になっても廃れることはなかった。中国の木簡にも隸書ばかりが書かれていたわけではないが、とりわけ日本においては、多種多様な文字が書かれた。それらにはプロの書き手によるものではない、名も無き人の書が多く含まれる。清書され、「作品」として完成されたものばかりでもない。日本で書かれた木簡の文字を書芸術としてどう見るか、書道史においてどう位置づけるかは、まだ十分に議論されてはいない。だからといって、「臨 木簡」がそのまま隸書を意図するような状況は好ましいとはいえない。それは換言すれば、「臨 高野切第一種」という作品を、すべて「臨 料紙」「料紙調」と表現してしまうことである。つまり、字体の多様性を損なうものに他ならない。「木簡に書く」という実践は、学生がこれまでに経験してきたような「隸書のみを書く」というものであってはならないだろう。習書木簡には、字体が微妙に異なる「馬」の字を書き連ねているものがあつた。それを眺めていると、書き手が字体の変化のおもしろさを感じているようにも思える。同じ字を微妙に異なるように書いていくことは、書の美的意識の芽生えでもあるのではないだろうか。「四面木簡」という特殊素材に墨書する実践からは、当初意図した芸術性と実用性の問題を考える手がかりを得ることに加え、「木簡を書くこと」の正しい意義を知ることのできるのである。

さらに、本実践を通して日本に残された多様な木簡の字体を分析し、評価していくことの重要性が強く実感された。そこからは、漢字、万葉仮名、仮名へと展開する過程、その過程に生じる美意識、その美意識からの字体の評価、さらにはその評価が確立するなら、その観点から釈文の見直しをおこなうことも可能となるであろう。

## 6. おわりに



以上、「四面木簡」に漢字、仮名、漢字仮名交じりの書を墨書する実践とその考察により、書道の芸術性と実用性の問題に挑む手がかりを得ることができたと考えられる。次年度以降もこの問題を考えるうえで有用な実践を開発していきたい。

本授業は大学院1年生前期に設定されたものであり、まだまだ書道の基礎段階である。そのため木簡への墨書は書体を指定しておこなったが、今後は、多様な木簡の字体への意識づけをおこなうためにも、特定の木簡の完全な研究復元も取り入れたい。古筆の造形分析をおこない、摩滅したものの復元などをおこなう専門の授業もあるが、これを入門期に導入する可能性も探していきたいと考えている。

### 謝辞

「はるくさ」木簡の資料提供については、財団法人大阪市文化財協会にお願いし、許可を得ることができた。同様に、観音寺遺跡出土「墨書四面『論語』木簡」については、公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターから画像使用の許可を得ることができた。その過程で、大阪市歴史博物館、徳島県立埋蔵文化財総合センター、奈良文化財研究所平城宮跡資料館のお世話になった。あわせてここに謝意を表したい。また、木簡については、東京文物・日野楠雄氏、展示にあたっては、奈良教育大学図書館の方々のお世話になった。130cmの角材15本を4面が見えるように並べるといふ類例のない展示形態となったが、細やかな配慮をいただき感謝にたえない。

### 注

- 1) 例えば、郭沫若は、殷代に甲骨文字で文を綴った人にも書家としての意識はあったはずだが、意図的に文字に装飾的要素を加えるのは春秋末になってからであり、これが書道(書法)の成立期だとする(郭沫若(1972)、「古代文字之弁証的發展」,考古学報,3期,pp.1-13. 現在、郭沫若(2005)『郭沫若集』所収,中国社会科学出版社)。
- 2) 朝鮮文化研究所(2007),韓国出土木簡の世界,創生社。
- 3) 徳島県埋蔵文化財センター(2002),観音寺遺跡I 観音寺遺跡木簡編,徳島県埋蔵文化財センター。
- 4) 渡辺晃宏(2019),「月城塚字出土木簡と日本古代木簡の比較」,科研報告書『木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結晶』II論考編,pp.121-138,奈良文化財研究所。
- 5) 藤岡忠美(2011),王朝文学の基層,和泉書院。原豊二(2016),「書きつける」者たち—歌物語の特殊筆記表現をめぐる—,日本文学,65号,pp.28-38。
- 6) 竹本晃(2009),「万葉歌木簡一考—あさなぎ木簡—」,万葉古代学研究所年報,7,万葉古代学研究所,

pp.47-65.

- 7) 柴原永遠男(2011),万葉歌木簡を追う,和泉書院。
- 8) 犬飼隆(2008),木簡から探る和歌の起源,笠間書院。
- 9) 前掲8) p.20.
- 10) 富谷至(2022),「書芸術の成立」,世界歴史6 中華世界の再編とユーラシア東部,岩波書店。
- 11) 前掲3) 参照。

### 参考文献

- 小松英雄(2021),いろはうた 日本語史へのいざない,講談社。
- 松本宏揮(2006),書法藝術の探求—理論・歴史・教育一,菅原書房。
- 横山煌平(2013),和様の書美,二玄社。
- 奈良文化財研究所(2022),「平城宮の調査第621次」,奈良文化財研究所紀要2022,p.154。
- 市大樹(2015),「黎明期の日本古代木簡」,国立歴史民俗博物館報告,194,pp.65-99。
- 飛鳥資料館(2010),木簡黎明,飛鳥資料館。
- 上野誠(2011),「難波津歌の伝—いわゆる安積山木簡から考える—」,文学・語学,196号,全国大学国語国文学会,pp.90-100。
- 遠藤邦基(2011),「あさなぎ木簡—左書きの意味すること」,萬葉語文研究第6集,萬葉語学文学研究会,pp.1-21。
- 乾善彦(2010),「歌木簡」の射程」,文学・語学,196号,全国大学国語国文学会,pp.81-89。
- 森岡隆(2006),「手習い歌の変遷の実相について」,書学書道史研究,16,pp.26-42。
- 瀬間正之(2020),「『論語』『千字文』の習書木簡から見た『古事記』中巻・下巻の区分」,上智大学国文学科紀要,37号,pp.97-132。
- 遠藤慶太(2013),「木簡の歌と歌語り—歌の儀礼を視野に入れて—」,万葉古代学研究所年報,11号,奈良県立万葉文化館,pp.117-133。
- 東野治之(1994),書の古代史,岩波書店。
- 東野治之(2005),日本古代史科学,岩波書店。
- 平川南(2000),墨書土器の研究,吉川弘文館。
- 甲州市教育委員会文化財課(2017),甲州市文化財調査報告書第25集「和歌刻書土器の発見」ケカチ遺跡と於曾郷。
- 平安京調査委員会(1975),平安京発掘調査報告:左京四条一坊。
- 京都市埋蔵文化財研究所(2013),平安京右京三条一坊・七町跡—西三条第(百花亭)跡一,京都市埋蔵文化財調査報告。
- 斎宮歴史博物館(1997),眠りから覚めた文字たち—斎宮跡の墨書土器。
- 河添房江他編(1999),交渉することは(叢書想像する平安文学),勉誠出版。